琉球大学学術リポジトリ

「つながる」ことに主眼を置く古典学習の研究 ―高等学校国語科の新科目「言語文化」における古文教材の学びを通して

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学大学院教育学研究科
	公開日: 2023-05-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 當間, 比呂
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002019878

「つながる」ことに主眼を置く古典学習の研究

—高等学校国語科の新科目「言語文化」における古文教材の学びを通して—

Designing the learning units of Japanese classical literature to connect to "the others" in high school

當間　比呂
Hiro TOUMA

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻

1.　テーマ設定の背景と研究目的

筆者が経験した高等学校教員としての３年間において，「古典を学ぶことに意味を感じられない」と認識している生徒は少なからず見受けられた。このような認識については，平成 28 年の中教審答申第 197 号においても，古典学習について「日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く，学習意欲が高まらない」（中央教育審議会 2016:127）との指摘がなされており，同様の課題意識は広く共有されていると考えられる。この「古典学習に汎用性を見出せない生徒の存在」は，本研究の出発点である。

古典学習の重要な意義の一つは， 学びの中で「他者」を発見し，ひいては自己を再認識することにある。これらは，作品世界の中に生きる「他者」の像を目の前に描き出し，その像と自らを批評的に重ね合わせる（＝「つながる」）プロセスの中でなされる。多様性に満ちた社会で他者と関わりながら現代を生きる我々にとって，古典学習を通してこのようなプロセスを体験することは，豊かな人生を送る上で欠かせないはずだ。現今の古典教育研究を牽引する一人である渡辺（2016:184）も，「古典は学習者との関係性の中で様々な姿で立ちあらわれ，学習者の生活と精神を相対化し，認識（感動），見方，指針，示唆，反省を新たにさせる。古典教育の意義はここに認めることができる。」とし，「学習者の古典への積極的な関わりは，読みに不可欠」であると述べている。

平成 30 年告示の高等学校学習指導要領（以下「新学習指導要領」）・第２章・第１節・国語には，言語活動を通して古典と学習者とを結びつけることを企図し，以下のような言語活動例を挙げて，教材を媒介として人間や社会のことを学ぶ機会を提案している（文部科学省 2019:37-46）。

古典を扱う新科目 「言語文化」および「古典探究」 「読むこと」の指導事項	・互いの解釈の違いについて話し合ったり，テーマを立ててまとめたりする活動 ・興味をもったことや疑問に感じたことについて，調べて発表したり議論したりする活動 ・読み比べ，思想や感情などの共通点や相違点について論述したり発表したりする活動

本研究では，まず新学習指導要領のもとに始まった新共通必履修科目「言語文化」の各検定教科書がこのような課題意識と向き合い得ることを検証する。その上で，古典と学習者の「つながり」を軸にした年間指導計画を提案し，学習者が学ぶ意味を実感できる古典学習について探究する。

2.　高等学校国語科学習指導要領の変遷における本研究の位置づけ

学習指導要領において言語活動重視の視点が現れるまでの概要（筆者による）　学習指導要領は，平成 30 年告示版で７度目の全面改訂を迎えた。学習指導要領の試案が発出された戦後の古典教育の出発期にはナショナリズム高揚への期待のもと経験主義的な教育が行われていた。その後，初の全面改訂となる昭和 33 年版では，地域間の学力格差是正を図る知識・技能育成重視型の能力主義の様相が見られるようになる。科学技術の進展や高度経済成長を背景に急激な社会変化に対応すべく加速したこの動きは，知識・技能育成偏重の発端となり，学習意義を実感できない古典嫌いの学習者を増加させた。そこで能力主義的教育観の是正を図った第４次（昭和 53 年）改訂では，生徒の言語能力発達の実際を見据えて指導事項を精選しつつ「理解」と「表現」の関連指導が促進され，今日にも求められる言語活動主義の先駆けとなっている。

以上のようにまとめるとき，知識・技能偏重からの脱却が目指すべき指標として示され，言語活動が重視される契機となった昭和 53 年の第４次改訂から早 40 年となる。この 40 年間に４度の全面改訂を経て，言語活動は，その都度止揚することを求められながら推進され続けている。そして現在，新学習指導要領のもと，これまでノウハウが培われてきた知識・技能伸長に向けた指導をも効果的に取り入れつつ，思考し判断し表現する力や学びに向かう力・人間性等といった「資質・能力」の育成を図る学習活動の構築が求められている。加えて，今日においてはそのような活動に応じた適切な学習評価の在り方も常に見直していく必要があるだろう。古典の学習に限らず新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」が目指されており，学びの先を見据え，社会で生きる主体としての「学習者」をいかに育てるかが肝要である。筆者の追究する「『つながる』古典学習」もまた以上の流れに与しつつ，育成したい「つながり」を想定した言語活動の継続的かつ効果的な設定を図ろうとするものである。

3.　研究方法

(1)　「言語文化」教科書調査の実際　　(2)　年間指導計画の作成
(3)　実習における実践の成果　　(4)　模擬授業実践における実践の成果

4.　「言語文化」教科書調査の実際

(1) 教科書調査の方法

新科目「言語文化」の検定教科書（９社 17 冊）の古文分野について，同社同系統に位置付く旧「国語総合」教科書との旧新間の比較検討をしながら，実態把握を行った。

(2) 教科書教材の調査から見えてきたこと

① 採録教材自体に大きな変更はないものの，「育成すべき資質・能力」を，単元や教材に沿って一覧で示し，それに伴う言語活動を充実させている（17 冊中 12 冊）→意義単純な読解活動に留まらない「資質・能力」を育む学びの展開が学習者に明示され，一つひとつの学習が系統性をもった学びであることが示唆される。

② 作品の解釈をより深めたり読み手が作品を積極的に享受したりすることを目指した言語活動が課題として確実に設けられるようになった（17 冊中 17 冊）→意義授業者・学習者双方に対して，知識・技能獲得に留まらない豊かな学びの在り方を意識下に置かせる働きかけとなっている。

③ これまで教科書外の便覧等で示されていた図版資料が，教科書内あるいはウェブ上（QR コードの記載）で閲覧できるように工夫されている（17 冊中 17 冊）→意義具体的なイメージにアクセスしやすくなったことで，言語活動以前にある基礎的な学びが効率的で確かなものとなり，読解の先の学習活動につなげやすくなった。

いずれも新学習指導要領が目指す古典の学びを象徴する改変であり，「言語文化」の各教科書においては，脈々と受け継がれてきた言語文化と学習者が「つながる」ための工夫が見て取れる。「学習項目の一つとしての古典（知識・技能習得のための学習）」から「人が育む・人を育む言語文化としての古典（今を生きる『資質・能力』を育むための学習）」へというねらいの変化が確認でき，これは，学習者を単純な暗記学習から離脱させるという点で，「つながる」古典学習にも生かされるものだと考えられる。

言語活動については，教材の末尾に必ず設定する教科書が 17 冊中 13 冊あり，それ以外の４冊においても単元の主軸になる教材には言語活動例を設定していた。また，教材単位に留まらず全単元末に単元目標に即した言語活動を設定する教科書が 17 冊中３冊あった。一方，言語活動例の実際をそれぞれ同社同系統の国語総合版と比較し精査してみると，国語総合版において設定されていた学習活動に「～話し合ってみよう。」と付け加えたにすぎない言語活動がほとんどであるなど些か工夫改善のバリエーションに乏しい教科書も見受けられる。

5. 年間指導計画の作成

前章の調査を通して，新科目「言語文化」および各検定教科書が概ね目指すべき「資質・能力」の育成に適していることが確認できた。それを踏まえて，高等学校の学びの現場では，生徒の実態に即してバランスよく「資質・能力」を育成する観点をもち，年間を通して言語活動の計画を立てる必要がある。このことを念頭に，筆者独自の年間指導計画を作成した（本稿末尾参照）。本計画は，生徒が学びを通して「つながる」ことを意識した各期の目標設定とそれに即した教材・言語活動の配置，「書くこと」の単元で各目標に沿った課題を設定することに留意して作成した。加えて，各単元で育む知識・技能および「資質・能力」を明確にして現場での活用を想定した内容としている。

ただし，スペースの都合上計画表の全てを掲出できないため，主な学習活動等は古文単元と「書くこと」を中心とした単元に絞り，各単元の「資質・能力」育成目標は重点をおくものを記載するに留めた。なお教科書は，教材毎単元毎に設定される言語活動例が充実している点，「古文編／漢文編／現代文編」という常套的な編集であり，学習者の実態や授業者の設定する目標に応じて単元をバランスよく取捨選択しやすい点を踏まえて，筑摩書房『言語文化』（言文 712）を使用した。

6. 実習における実践の成果

本専攻のカリキュラムに設定され，筆者が行った実習３回の概要は以下の通りである。

	実習校	実習期間	対象学年	科目名	教材
実習１	沖縄県立Ａ高等学校	令和３年９月	第１学年	国語総合	児のそら寝（『宇治拾遺物語』）
実習２	沖縄県立Ｂ高等学校	令和４年２月	第２学年	古典Ｂ	門出（『更級日記』）
実習３		令和４年６月～７月	第１学年	言語文化	亀山殿の御池に（『徒然草』）

しかしながらこれらの実習では，新型コロナウイルス感染症の影響等もあり，本研究の検証のために計画していた言語活動に取り組む機会を十分に設けることができなかった。そこで検証は，学内で行った模擬授業実践（次章）に委ねることにした。

以下は実習３の概要である。「つながる」古典学習という筆者のテーマに関連して得られた成果を，生徒の反応と合わせて掲載する。

	計画	生徒からの反応
第１時	単元の導入として作品について学ぶ／次時からの文法学習について意味を考え，考えを共有する	・「表現を上手く，伝わりやすくするため（文法を学ぶ）」等学習の意義について意見が出た。
２時	品詞の捉え方や用言の活用について考え，本文に沿って現代語訳の仕方に合わせて演習を行う	・本時のはじめの文法の学びが本文理解に生きたとの振り返りがみられた。
３時	イラストを用いたスライドで本文に目を通したのち，全体の訳をまとめ，本文に登場する「大井の土民」「宇治の里人」の対比について考える	・二者の対比や本文の構成（末尾に筆者の考えが表れている等）の学びを通して，「理解を深められた」との振り返りあり。
４時	本文の構成についてまとめる	新型コロナ感染拡大に伴う行事予定変更等により計画通り行えず授業後の課題で代替等
５時	本文と同教訓を導くような体験を日常の中から探し，文章にする。	
６時	第５時に書いた文章を用いてグループ交流を行う。	

対象：沖縄県立Ｂ高等学校第１学年　４クラス（108 名）
使用テキスト：東京書籍『新編言語文化』（言文 701）
教材：「亀山殿の御池に」（『徒然草』第 51 段）

生徒からの反応（原文ママ）と成果

○（第２時を終えて）「文法は交通ルールと同じ共通理解で，相手との意志そ通をスムーズに行うためのものと分かった。」
→文法学習の意義を考え意見交流する時間によって，学習が日常生活と関連性をもつということを認識してもらうことができた。

○（本文学習を終えて）「本文を絵で書いて説明してて分かりやすかった。」
→文字のみでなくイラストを添えることで，理解を促すことができた（このことによって，本文学習の効率化が図れる）。

7.　模擬授業実践における実践の成果

本研究の検証にあたっては下記の通り模擬授業を実践した。本研究の目指す「つながる」古典学習に向けて１単元分の授業を構想し，教育学部国語教育専修の学生を生徒役として実践，授業内における発言やワークシートの記述，授業後のアンケートをもとに考察した。

実践名	単元内の授業構想	教材	対象	実践日
模擬授業実践１	第１次の実践	『伊勢物語』芥川	教育学部国語教育専修３・４年次	令和４年度 10 月 14 日，10 月 21 日
模擬授業実践２	第２次の実践	『伊勢物語』筒井筒		令和３年度 12 月 10 日，12 月 17 日

令和３年度 12 月の実践前には，生徒役の学生６名を対象に事前意識調査を行った。「高校までに受けてきた古典の授業における『作品』の扱いについて」選択式で問うたところ，６名全員が「書かれている内容を適切に読み取る訓練のための『作品』」「文法や修辞法を学ぶための『作品』」という扱いであったとし，古典の授業が知識・技能習得のための学習に終始していたという印象を持っていることがわかった。また，取り上げられる作品が「自分の考えや経験を改めて見つめるための『作品』」として扱われていたとする回答は２名に留まり，多くの学習者が作品と自身との間に主体的に「つながり」を見出していないことが示唆された。

模擬授業は，前々項で作成した年間指導計画に則り第１学年の古文教材を扱う第２単元として実践した。単元名を「歌物語における表現に着目し，作品に表れた人物の描写とその心情を読み味わう」とし，第１次２時間（模擬授業実践１）第２次３時間（模擬授業実践２）として設定した。本単元を通して，人間の普遍的な姿を探る中で得る「作品との出会い」「作中の登場人物との出会い」が学習者自身の自己理解を深める契機になる，そのような「つながり」観の育成をねらった。

表１　単元計画

単元の指導と評価の計画（全５時）
単元を通じての問い「作品世界の人と対面したとき、あなたは自分自身と他者とをどう捉えるか」

次	時	主な学習活動	指導上の留意点	評価規準 **（評価方法）** ・指導に生かす評価 ○記録に残す評価
1 芥川	1	① 単元目標の確認と単元ワークシートの活用方法について確認する（全体）。 ② 話のあらすじを視覚的に追いながら本文を通読する（全体）。 ③ 「白玉か」までの本文の流れについて、本文に用いられる動詞を挙げる（個人）。 ④ ③の活動で挙げた動詞を登場人物ごとに分け確認することを通して、あらすじを理解する。	目標：歌の詠まれた状況について、本文の内容を理解することができる。 ② ：本文の正確な読みを確認する前に、物語の流れを視覚情報（図）から取り込んでもらう。	古典の世界に親しむために，作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解することができる。（（２）イ）**〈ワークシート〉**
	2	① 前時の振り返りを行う（全体）。 ② 「女」の生い立ち、彼女に求婚するも遂には「盗み出」だすしか結ばれる方法がなかった「男」の境遇を確認する（全体）。 ③ ②の学習を踏まえて「白玉か」の和歌の裏に隠れた語られない詳細な想いを日記のかたちでリライトする（個人）。 ④ ③の活動内容をグループ・全体で共有し、男の想いについての理解を深める。 ⑤ 学習後に自分自身が感じたことをまとめる。	目標：男の和歌に表れた心情の読解を行い、その捉え方や感じ方を比較するなどして理解を深める。	作品や文章の成立した背景との関連を踏まえ、内容の解釈を深めることができる。（B 読むこと（１）エ）**〈ワークシート・発表〉**
2 筒井筒	1	① 「男」と「もとの女（大和の女）」のストーリーを学習する。	目標：「男」と「大和の女」の行動と心情を、叙述を基に理解する。 ・本時に向けて内容を理解していることが求められるので、振り返りクイズを行う。	古典の世界に親しむために，作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解することができる。（（２）イ）**〈振り返りクイズ〉**
	2	① 「男」と「高安の女」のストーリーを学習する。	目標：「男」と「高安の女」の行動と心情を、叙述を基に理解する。 ・本時に向けて内容を理解していることが求められるので、振り返りクイズを行う。 ・特に現代との価値観の違いが表れる部分（「てづから…」）があるので、そこに注目させる工夫を行う。	古典の世界に親しむために，作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解することができる。（（２）イ）**〈振り返りクイズ〉**
	3	① もし自分が登場人物の女人であるなら、どこでどのように登場して、どう働きかけを行うか考える。 ② ①の活動の発表をうけ、分析例を参考にしつつ自己分析し、自身の価値観について考察する。	目標：言動の背景などから自分と作品世界中の価値観について考える。 ・対面で授業を行う（授業時間：50 分） ・単元振り返りシートのまとめまで行う。	作品の内容や解釈を踏まえ，自分のものの見方，感じ方，考え方を深め，我が国の言語文化について自分の考えをもつことができる。（B 読むこと（１）オ）**〈単元ワークシート〉**

(1)　模擬授業実践１の実際

〔１〕教材名

歌物語における表現に着目しながら，作品に表れた人物の描写とそこに表される心情を読み味わう／『伊勢物語』芥川（第１次）

〔２〕本次で育成したい「つながり」観

登場人物の心情に寄り添い，時代を経てもなお人の心の在り方に普遍性があることに気付くこと。⇒手立てとして，和歌に表されている心情をより詳細に再現する活動を取り入れた。

〔３〕実践の流れ

第１次第１時：文学史にまつわる基礎的事項の確認を踏まえ，本文中の動詞を取り上げる活動を通して「芥川」のあらすじを確認した。

第１次第２時：前時の学習を踏まえて「芥川」に登場する「男」と「女」の境遇を推察した上で，「男」の和歌に表れた心情に寄り添って人物理解を深めた。

表２　学習指導案（第１次１時）

本時の学習（第１次１／２時間、全１／５時間）

（１）本時の目標
歌の詠まれた状況について、本文の内容を理解することができる。

（２）本時の展開

	学習活動	○指導上の留意点 ★予想される生徒の意見・反応	評価項目 （評価方法）
導入8分	① 単元の問いと単元ワークシートの活用法について確認する（全	○見通しを持たせ、生徒たちと教師とで目的を共有する。	
	目標：歌の詠まれた状況について、本文の内容を理解することができる。 本時の手がかり：登場人物の言動が表れた語を抜き出して考える。		
展開35分	② 話のあらすじを視覚的に追いながら本文を通読する（全体）。 ③ 「白玉か」までの本文の流れについて、各登場人物の言動が表れた語（主として動詞）を手掛かりにまとめた表を作成する（グループ）。 ④ 全体で共有する。	○はじめに、状況を図解したものに合わせて本文を通読し、あらすじをおおまかに捉えさせ、その後、振り仮名をメモさせるなどして読みを改めて確認する。 ★グループ活動に参加できない（参加しない）生徒がいることも考えられるので、一人ひとりに役割を持たせる（①「男」の言動が表れた語を見つける係、②「女」の〃、③記録しながら①②の選択が正しいか確認する係）。 ○グループごとに１つずつ挙げさせて、内容を追っていく。	
終末7分	⑤ 本時のまとめを書く。	○本時の目標に沿うように、（歌が詠まれるまでの状況について、本文の内容を理解できたか）まとめでは、分かった内容を自身の言葉で言い換えさせる。	古典の世界に親しむために，作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解することができているか。（（２）イ）《ワークシート》

（４）本時において育成したい「つながり」観
（次時で登場人物の心情に目を向けられるよう、本時は本文の内容を理解する時間として設定した。）

（５）本時におけるルーブリック評価案
Ｂ：授業内（全体）で取り上げられた内容が全てワークシートに記入されている。

表３　学習指導案（第１次２時）

本時の学習（第１次２／２時間、全２／５時間）

（１）本時の目標
男の和歌に表れた心情の読解を行い、自分の読解と他の学習者の捉え方・感じ方とを比較するなどして理解を深める。

（２）本時の展開

	学習活動	○指導上の留意点 ★予想される生徒の意見・反応	評価項目 （評価方法）
導入17分	① 前時の振り返りを行う（全体）。 ② 音読を行う。 ③ 「女」の生い立ち、彼女に求婚するも逃げられた「盗み出」だすしか結ばれる方法がなかった「男」の境遇を確認する（全体）。	○見通しを持たせ、生徒たちと教師とで目的を共有する。	
	目標：男の和歌に表れた心情の想像し、作品の読みを深める。 本時の手がかり：「男」と「女」の置かれている環境（背景）と言動を参考にしながら、和歌に込められた想いを想像する。 自分の読解と他の学習者の捉え方・感じ方とを比較して、読みを深める。		
展開25分	④ ②の学習を踏まえて「白玉か」の和歌の裏に隠れた語られない詳細な想いを日記のかたちでリライトする（個人）。 ⑤ ③の活動内容をグループ・全体で共有し、男の想いについての理解を深める（グループ・全体）。	○歌が生まれる状況を想起（詳らかには語られない想いがあること、それによって解釈に多様性が生まれることで新しく物語が生まれていくこと）しながら、日記のかたちをとったリライトを行う。 ★④に困難を感じる生徒がいるはずなので、教科書にある「奈良絵本伊勢物語」の挿絵「女を盗み出す」を参考に、男は「かれは何ぞ」と問うた女をどう見ていた（思っていた）か、女亡き今その時の彼女のどのような様子を思い出していたかと想像を膨らませるよう促す。（テンプレートを出すとしたら、「あなたはあのとき…していましたね。私は今、あなたのその様子を思い出して…気持ちになってしまい、『露と…』」のような） ○グループで代表者を選び、発表してもらう。	
終末8分	⑥ 学習後に自分自身が感じたことをまとめる。	○本時の目標にも沿うように、自身の言葉で書かせる。	作品や文章の成立した背景との関連を踏まえ、内容の解釈を深めることができる。（B読むこと（１）エ）《ワークシート・発表》

（４）本時において育成したい「つながり」観
他者（ここでは『伊勢物語』の「男」と「女」）の背景に目を向け、表現の先にある想いを汲み取ろうとすることで、現代においても必要な資質を古典でも培うことができることに注目させたい。

（５）本時におけるルーブリック評価案
Ｂ：「男」の心情に目を向けて記述できている（これなしに「自分なら…」と論述を始めており表現から登場人物の心情を想像できていない場合は設問に沿っていないのでＢとはしない。B評価のものに加えて先のような論述などがあればＡとする。）

〔４〕生徒の変容に関する考察

第１時では，動詞とその主語を確認する学習をもとにあらすじを各々で作成し，第２時では，「男」の和歌に表れた心情をより詳細に再現する活動を行った。以下に，ある生徒役の活動例を示す。

第１時ワークシート	第２時ワークシート
昔，得難い女性を長年求婚し続けてきた男がいた。女を盗み出した男が芥川に行くと，草の上の露を見た女が「あれは何か」と聞いた。夜も更け天候も悪かったので，あばら屋に女を押し入れ，男は戸口にいた。すると，中にいた鬼が女を食べてしまった。男が雷のせいで女の声に気付かなかった。地団太を踏んで泣いたが，どうしようもなかった。	その日は，私が彼女をなんとか手に入れ，これからの未来を明るく想像していましたが，空はというと雷雨の激しくなる前のどんよりとした空模様でした。その時からこうなる未来は予想されていたのでしょうか。彼女は私に「あれは何か」と問いかけた時，梅雨だと答えていれば彼女と共に消えてしまえただろうか。彼女は外の世界を知り，少しうれしそうに，けれども少し不安そうに恐る恐る私に聞いたのでしょう。それなのに私は，彼女を手に入れた喜びしか感じておらず，舞い上がる気持ちのまま，彼女のことも考えずに突き進んでしまいました。あぁ，私は何と答えたらよかったのでしょうか。そうですね，露と答えて俱に消えてしまえばよかったのだろうと，今更ながらに思うのです。

「男」が和歌に託した心情を想像し別の文体で再現するにあたっては，具体的な手立てとして，第２時の活動前に「男」「女」それぞれの境遇について確認した上で，「本文には描かれていない登場人物の様子やその時に五感で感じることがあっただろう事象を想像して，想いを寄せるようにして書いてみよう」といった声掛けを行った。この生徒役の記述における下線部（筆者による）を参照すると，第２時ワークシートにおいて，本文（原文）の解釈を踏まえつつ，作品内で描かれることのなかった「男」から見た「女」の様子を想像し，それを回顧する「男」の反省と後悔とを記述している。他の生徒役の記述でも，「男」が感じ得ただろう情景に言及し，「露と答へて消えなましものを」に滲む「男」の心情をより詳細に想像し表現できていた。結果，読解の技術向上という目標を内包しつつ次時の心情推察に向けた学習を行った第１時を踏まえ，現代にも通ずる普遍的な感覚やそれをもとにした想像力を働かせて

重層的な読みを導くプロセスを第２時で体験してもらうことができたといえるだろう。その後の作品交流は，客観的な視点を認識してもらう目的で設定した。今回は実践順の都合上検証に至らなかったが，登場人物の心情に細やかに寄り添い，言語化し，客観的視点を認識することを目指したこの時間が，次時以降の学びにつながると考えている。

(2)　模擬授業実践２の実際

〔１〕教材名

歌物語における表現に着目しながら，作品に表れた人物の描写とそこに表される心情を読み味わう／『伊勢物語』筒井筒（第２次）

〔２〕本次において育成したい「つながり」観

登場人物に対して読者としての主観をもった「自分」として向き合い，相手（登場人物）と自分の間に関連性を探る中で，自己への認識をも深められることを知ること。⇒手立てとして，登場人物の人物像を探るのみならず，学習者自身の在り方についても考える時間を設定した。

〔３〕実践の流れ

第２次第１・２時（12 月 10 日）：単元計画の全体像を説明し，本文読解を中心とした実践を行った。

第２次第３時（12 月 17 日）：下記の指導案に示される言語活動を中心とする授業を実践した。

表４　本時の学習指導案（第２次３時）

（1）教材観

本単元で扱う「筒井筒（『伊勢物語』）」を３段構成として捉えると、以下のようになる。

第1段：教科書３６頁1行～１０行（昔、田舎わららひしける～本意のごとくあひにけり。）

第2段：３６頁１１行～３８頁1行（さて、年ごろ～何内へも行かずになりにけり。）

第3段：３８頁２行～（まれまれ、かの高安に～男住まずなりにけり。）

第１段は、現代でも純愛を描いた物語であるとして生徒たちからも受け入れられそうな展開となっており、その学習は作品世界に引き付ける効果があると考えられる。第２段以降は、当時の文化・習俗が色濃く反映されたものと見られるが、異文化の中にある普遍的な人物の心情に注目し、その作品世界に生きる人々と現代に生きる自分とを対照させて、自己理解を促すような活動を取り入れたい。そこから、異なる価値観をもつ他者を理解しようとする資質・能力の育成を目指す。

（2）本時の目標

登場人物の言動の背景を読み取り自分と作品世界中の価値観について考える中で、自己理解の深化を図る。

（3）本時の展開

	学習活動	○指導上の留意点 ★予想される生徒の意見・反応	評価項目 (評価方法)
導入７分	① 前時までの振り返りを行う。 ② 本時の目標・活動内容を確認する。	○見通しを持たせ、生徒たちと教師とで目的を共有する。	・既習事項の定着状況はどうか。 (授業中の反応)
	目標：登場人物の言動の背景を読み取り、自分と作品の世界中の価値観について考える。 本時の手がかり：自分が登場人物の友人格として作品の世界に生きるなら、友人にどのような助言をするか。		
展開３５分	③ ワークシートの問一・二に取り組む。 問「（ 誰 ）の友人になって（ 何 ）と声をかけるか。」 問「(登場人物のどのような言動からどのような考えを感じ取って、どのような意図で声をかけたか。)」 ④ ヒントを基に自己分析を行う。また、自己分析が難しいようであれば、相談可とする。 ⑤ 発表を行う。	★「私なら、高安の女の友人になって、『ずっと先の世の中なら自分の手でごはんよそうくらいの自立した女性のほうが良いってきっとなるよ。男はこの人だけじゃないし、もっと広い世界があるよ。』って声をかけるな。」 ★「もし男の友人になったら、『そっけない様子なのを見て相手の心変わりを疑う気持ち、分かるよ。』って声をかける。」 ○どうしてもクラスメートに見られたくないようなことしか思い浮かばないようなら、この活動後の自己分析はグループを介さないような形にするのも可能なので、自由に書くようにという旨を伝える。 ○ヒントは黒板に掲示する。内容としては、「注目すべきポイント①どの時代の価値観で助言をしているか　②なぜその人の友人になることを選んだのか　③共感（同調）しているのか、反対する意見を提案するのか、それ以外か」を通して、客観的にみた自分の価値観を捉える。 ★発表者が出てこない。 →もし前で発表できる生徒がいなければ、④の机間指導中で声をかけた生徒の考えを匿名で公開するなどする。	・作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めることができるか。 (ワークシート) ・他者である登場人物と自己とを対照することを通して、自分の発言や行動のパターンを回顧し、客観的に見つめることができるか。 (ワークシート)
終末８分	⑥ 本時のまとめを書く。	○本時の目標に沿う（価値観・考え方に注目する）考察を行うよう指示する。	・作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めることができるか。 (ワークシート)

〔４〕生徒の変容に関する考察

模擬授業実践後，生徒役に対して感想や意見等を直接聞くリフレクションの場を設けるとともに匿名回答可のアンケートを実施した。アンケートにおいて生徒役６名に再び作品の扱いについて尋ねたところ，「自分の考えや経験を改めて見つめるための『作品』」として捉えたと全員が回答し，実践前とは作品の捉え方に転換が起きていた。また，本単元の活動において文法学習や現代語訳などによる読解能力育成ばかりを重要視しないことで，自由な読みを展開し古典世界とのつながりを体感できたという回答が見られた。

本実践で得られた知見としては，大きく以下の２つが挙げられる。

① <u>メタ認知的な視点に立って作品中の登場人物と自己とを比較する活動が，今回の活動が想定した「育成したい『つながり』観」の醸成に効果的であったということ</u>

本実践後のアンケート項目の一つに「今回の学びの中で，古典作品の世界と自分や現代社会との間に共通点や相違点を感じたり，それをもとに自分の生き方や社会の在り方について考えたりする機会はありましたか。」という問いを設けたところ，６名中４名が「よくあった」と回答し，残る２名が「あった」と回答した。「あった」と回答した生徒役によると，「授業内で『現代の恋愛相談みたい』という発言があるなど，自分を友人として登場させた際の価値観が現代的(あるいは古典的)であるという観点があり，現代と作中世界

の比較を自分の中で行ったため，自身のことなので見えづらい現代の感覚をメタ的に感じ取ることが出来た。(原文ママ)」との回答があり，本授業において育成したい「つながり」観が醸成されたことがうかがわれた。

② 人物に切り込む言語活動は自己否定を伴う深い反省に繋がりかねないが，周囲との関係性に配慮しつつ支援していくことで，前向きに活動に取り組んでもらえるということ

ある生徒役は，本時の展開④（自身の考える登場人物への反応を基に自己分析を行うというもの）の中で，ペアの学生と自身を比較した上で当初「相手に寄り添えていそうで寄り添えていない，いらないお節介をやさしさと勘違いしているような『浅い』価値観をもつ人物」と自己分析した。しかし，そのような評価に至る理由について考えるよう声掛けを行い，授業者として注視しつつペアの生徒役との対話を続けてもらったところ，最終的に「『違い』を踏まえつつも『同じ』ところを見出すことが他者理解に通じていくのではないかと考えた。〈共感〉は何よりも人と人とをつなぐ架け橋だと感じた。」とのまとめを残しており，学習者間の関係性に助けられながらも前向きに活動を捉えることができた様子がみられた。授業後に回収したワークシートでは，自身が何を良いもの・理想的なものとして感じるのかという価値観に改めて触れる機会となった様子もうかがわれた。

8. おわりに

本研究では，はじめに授業実践のベースとなる教科書について各社が「言語文化」という科目においてどのような学習が展開されようとしているかを調査した上で，当科目において学習者がより深い学びを獲得するための言語活動はどのような工夫によって仕組まれるべきかを考察した。その結果，筆者の目指す「つながる」古典（古文）学習が「言語文化」という科目の意図に相反しないこと，この新科目においてはこれまで以上に体系的な学びが必要であることが分かった。

これを踏まえて，年間指導計画を構想し，模擬授業による授業実践例の提案を行い，大学生を対象にした模擬授業実践では一定の成果を得ることができた。しかし，実際の高等学校の教室では大学入試等を見据えた未だ従来型の読解能力主義にとらわれることも予想される。新科目「言語文化」における古典学習の意義については，教師と生徒との理解の共有を図る必要があることにも気付きを得た。

一方，未だ現場で実際の高校生を対象とした体系的な学習活動を展開することはできていない点に本研究の弱さがある。今後，県内の高等学校において継続的に実践の機会を得ることができた際には，生徒の実態に鑑みつつ，同科目担当者との間でどのように共通理解を図ってゆくかという点も含めて慎重に計画し，まずは本研究で追究したような「つながる」古典学習の体系的な実践を目指したい。今後は，より多くの学習者が古典学習を有意義なものと感じられる実践を目指して，「教材に触れる中で，他者についての気付きを得て社会を知り，ひいては自己についての認識を深化できるような学びを得られる古典学習」について考察を深め，研究と発信を続ける。

引用文献

中央教育審議会，2016，『幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』，(2022 年 1 月 17 日取得，https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf).

文部科学省，2019，『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）』，東洋館出版社.

渡辺春美，2016，『古典教育の創造―授業の活性化を求めて―』，溪水社.

表５　年間指導計画（筑摩書房『言語文化』／言文 712　を授業内ではテキストとして使用することを想定し作成した）

	前期						中期						後期				
目標	学習者が、自分自身と作品世界にアッ変わる人々との間に「つながり」を見出せるようにすること						学習者が、自らの置かれている社会と作品世界に表れる社会との間に「つながり」を見出せるようにすること						1・2学期の学びを踏まえて、人間や社会、文化などに対して自身の言葉で表現できるようにすること				
単元名	【言語文化への扉】	【現代文／想像力がひらく世界】	【人間の普遍的な姿】	【自分という他者】	【漢文／漢語の特色】「虎の威を借る」「寄倚が島」	【前期のまとめ】	【現代文／多彩な表現とイメージ】「愛された過ぎた白鳥」	【漢文／韻文の表現】「登岳陽楼」「江雪」	【転換期の文体と行動】	【漢文／言動に表れる人間の本質】「管鮑の交わり」	【韻文の表現】	【中期のまとめ】	【表現のつながり】	【漢文／読み継がれることば】「朝三暮四」（『列子』『荘子』）	【現代文／多彩な表現とイメージ】「失われた角鹿」	【ことばに表れる意思】	【今年度のまとめ】
教材	見のそら寝 絵仏師良秀 （『宇治拾遺物語』）		芥川 筒井筒 （『伊勢物語』）	門出 亡き児ををしのぶ 帰京 （『土佐日記』）		（これまでの学習材を用いて振り返りを行う）			木曾の最期 （『平家物語』）		『万葉集』 『古今和歌集』 『新古今和歌集』	（これまでの学習材を用いて振り返りを行う）	香炉峰下、新卜山居、草堂初成、偶題東壁 （『白氏文集』） 雪のいと高う降りたるを （『枕草子』）			花は盛りに （『徒然草』） 数好が岡のあげつらひ （『玉勝間』）	（これまでの学習材を用いて振り返りを行う）
時数	3		5	5		2			7		3	3	3			2	2
【ねがい】獲得を目指したい「つながり」観	「自分の見方と他者の見方とそれぞれ観察し、物事のあり方は見方によって多面的である」		「古典学習において人間の普遍的な姿を探る中でも、自己理解を深める契機は得られる」	「他者に言葉を託すことの意味を考え、自身の表現の一つのあり方として使うことができる」					「社会背景と人物の行動、そこに表れる価値観との間には関連がある」		「古典作品に表れた人間に対する見方を学ぶことによって、現代の人間や社会に対して自分の見方を持てる」		「教科書で学ぶ言語文化の連なりは現代まで続いている」			「主題と表現の変遷を追うと、社会における表現のあり方の変化が見える」	
【ねらい】主な学習内容および評価の観点	・人となりは誰かの存在によって見えてくるものであることを理解する。 ・人の普遍的な姿を探り、現代と古典作品の世界との関連を見出そうとする。 ＊知・技(2)イ ＊思・判・表B(1)オ		・古典の世界に親しむために、『伊勢物語』の歴史的・文化的背景などを理解している。 ・現代との違いも踏まえて人の心の動きについて学ぼうとしている。 ・時間の経過による言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉のつながりについて理解している。 ＊知・技(2)エ ＊思・判・表B(1)イ	・作品に表れている批評や諧謔の精神と、亡児追悼の心情を捉え、内容を解釈する。 学習の見通しをもって虚構性の高い日記を読み、執筆意図などについて積極的に批評したり討論したりしようとしている。 ＊知・技(2)イ ＊思・判・表B(1)ウ		・1学期の学習を振り返り、どのような作品と出会い、一読者として向き合う中で何を思ったのか、その時の想いを記す。 ・語彙を増やしながら、表現を磨き、自分の言葉で言い表す。 ＊知・技(1)イ ＊思・判・表A(1)ア			・合戦を主題とした文学作品を読み、争いを背景として生まれた思想や人間の有り様を知る。 ・軍記物語という文章の種類を踏まえて、内容や展開を的確に捉える。 ・作品に表れている無常観や武士の生き方を捉え、内容を解釈する。 ＊知・技(2)イ ＊思・判・表B(1)ア		・我が国の伝統文化の一つである和歌の鑑賞の仕方を理解し、黎明期・発展期・成熟期それぞれの和歌の特色を捉える。 ・和歌という文章の種類を踏まえて、情景や心情など、内容や展開を的確に捉える。 ・和歌の修辞技法を読んで理解し、学習の見通しをもって和歌文芸の特徴を捉えようとしている。 ＊知・技(1)オ ＊思・判・表B(1)イ	・2学期の学習内容を踏まえて、「人」の捉り方を頼りに現実社会について捉える。 ・学んだことをグループでまとめて発表する。 ・これまでの学びを踏まえて今いる社会を客観的にとらえ、それを言語化する。 ＊知・技(1)ウ ＊思・判・表A(1)ア	・詩と『枕草子』を読み比べて、わが国の言語文化に特徴的な語句の量を増やし、それらの文化的背景について理解を深め、文章の中で使うことを通して、五感を磨き語彙を豊かにしようとしている。 ・詩を通して、我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解している。 ＊知・技(2)ア ＊思・判・表B(1)エ			・『枕草子』とは異なる思索的な随筆を読んで、作者の批判的精神が提示する事柄を具体的に読み解く。 ・作品具表れているものの見方や考え方を捉え、内容を解釈する。 ・玉勝間に記された反論についても学習し、本居宣長が「そのように反応する理由は何か考える。 ＊知・技(2)イ ＊思・判・表B(1)イ	・身近なところで触れられる言語文化に関して、自らの感じること・考えることを随筆に書き表す。 ・身近な言語文化に関して積極的に題材を集め、集めた題材の良さや味わいを吟味しようとしている。 ・自分と文化的な体験の関わりを振り返り、構成や表現に工夫を凝らして随筆を書こうとしている。 ＊知・技(2)ア ＊思・判・表B(1)イ
言語活動例	物語の面白さが伝わる4コマ漫画を作成する		作品世界の人物を自身の視点で捉え、その価値観を検討する	他者仮託の文章を書く		作品との出会いを振り返り、読者としての想いを言語化する			「木曾の最期」を脚本化する		学習者の日常生活や現代における表現・作品に置き換えて主題について検討する	自分が身を置く社会について客観的な視点で捉え言語化する	身近にある典拠の事例を挙げ主題をどのように展開させているか考察する			現代にも残る表現を探りつつ、人々が表現をどのように受け継いできたか考える	身近な言語文化に関して、自ら感じること・考えることを随筆に書き表す
知識・技能獲得に関連した学習事項	・歴史的仮名遣い ・品詞の分類		・用言の活用 ・音便 ・係り結びの法則	・助動詞		・語彙			・敬語法		・和歌の修辞	・語彙	・漢詩のきまり ・句法 ・敬語 ・助動詞			・助詞	・語彙